

中国内陸農村訪問調査報告（5）

内山雅生 菅野智博 祁建民

The Report of House-to-House Investigation in Rural Community of Inland China (5)
Uchiyama Masao Kanno Tomohiro Qi Jianmin

概要

本稿は、2013年8月に筆者をはじめとする中国農村研究者が中国山西省P県N郷D村と四社五村で実施した聞き取り調査の報告書の一部である。老農民・幹部経験者・村落婦人・農村教師・農民企業家など農村の諸階層から聞き取り調査を行い、1940年前後を起点とする70年間の農村変革の歴史的過程を追跡した。その際に、農民との質問応答録を原則としてそのまま収録することによって、村落社会の多様な面に照明を当て、村民の視点に立った家族史・村落史の再構成を目指した。

キーワード：中国内陸農村、個人史、家族関係、水利史

2013年8月に、筆者をはじめとする中国農村研究者は、2012年8月に引き続き、中国山西省P県N郷D村で聞き取り調査を実施した。なお、本稿でも『中国内陸農村訪問調査報告（4）』と同様に、プライバシーの保護に配慮して村民の実名の表記は極力避けるようにした。

このプロジェクトは、2010年より5年間の予定で開始された、平成22年度基盤研究（A）（海外学術調査）「近現代中国農村における環境ガバナンスと伝統社会に関する史的研究」によって実施している。

一、P県D村

JSL

訪問日時：8月14日午後 訪問者：祁・内山 訪問場所：JSL宅

※一年ぶりの訪問。午後3時過ぎ、水曜日のため、教会の仕事の関係で、遅い昼食を庭先でとっていた。奥さんは腰を痛めている様子。本人も自転車で事故にあい、腰を痛めた。現在も乗車できない状況。県城の教会に通うことができないとのこと。（三男が通りかかると）侯郭村の廟が建設されるので、仏像を作っていると説明。

キリスト教について

・現在も党员であるので、洗礼を受けていない。キリスト教を支持する立場だ。入口に貼られた双聯は、教会から配られたものだ。今日は水曜日なので、午前 10 時から 12 時まで侯林沅さんの所に出かけていた。水曜日の集会には、16、7 名が、日曜日の集会には、20 数名が参加している。数年前は 9 人だったが、侯さんが宣伝したからだ。

幹部時代の工作隊について

・1960 年、TKY が書記の時、大躍進運動で虚報をした。そのため村民一人当たり 6 両しか支給されなかった。足が腫れる者が出て、死者は 207 人に上った。1960 年、61 年には子供が 9 人しか出産しなかった。女性のほとんどに生理がこなかった。

・山西省青年団書記長の童雲はこの村の人の娘婿だった。村民の訴えにより、山西省党委員会の書記陶魯茄が D 村を救済するために、この村に地区の工作隊を派遣するように命令した。地区の商業局長と県の董財貿部長をはじめとする工作隊が 20 数名来て、患者の食堂を視察した。

・村の書記の TKY と村の主任の DZS は、「坏人」として批判され、解任された。当時自分は青年団の書記長であった。工作隊により村の党の副書記となった。国から 20 万元の支援を受けた。

四清運動時期の工作隊

・北京から科学者が来て、村民の多くの死因は、食糧不足と水質の悪化だったことが分かった。工作隊は農民の家を一軒ずつ回って、意見を集めていた。字が読み書きできる少数の者は自分で意見書を書いたが、文盲の者からは、工作隊が聞き書きしていた。工作隊は意見をまとめて幹部に伝え、幹部は村民大会で意見を述べた。その後工作隊は、幹部に対する処分を発表した。工作隊は、「大民主」を行ったのだ。(工作隊は、村民が幹部についての批判的な意見を書いたメモを見せていないだろうと思われる。)

・工作隊は、「農民と同じものを食べ、同じところに住み、同じ仕事をする」と言われた。董部長は私の家に宿泊した。彼らは会議以外では農民と同じ労働に従事し、飯券をもらって公共食堂で食事をした。飯券には公印と本人の印鑑、さらに私の印鑑が押されてあった。しかし県の商業局の副局長は公印と自分の印鑑を押した飯券で食事をした。そこで私が地区の財貿部の董部長に告発したので、副局長は批判され、除名となり、故郷に送還された。国家幹部や地区幹部には 1.5 斤が支給されるはずだが、0.8 斤しか支給されなかった。さらに幹部が、食堂から高粱の粉を自宅に持ち帰り、お湯の中に麺を入れた「面茶」を作って食べた。そこで食堂の管理人(司務長)は村民から工作隊に変わった。管理人が横領していたからだ。料理人は村民だった。

・私は幼い時に父が亡くなったので、塾にも行けなかった。幹部になっても記憶力がよい

ので評価された。字は書けないので他人に書いてもらった。

・公社の副主任の WJY はある村の幹部にごちそうされ、汚職をしたとして移動させられた。

文革時の紅衛兵

・太原で「焼荒」が起き、村の幹部が批判された。村の紅衛兵は、村の教師であった WD、民兵營長であった HYQ、村の副主任の TLM、青年団書記長の DSQ（女性）が中心。現在、W は在村、H は洪善農業機械の労働者、T は工作隊員として平遥県城に住み、国家幹部になった。董は他村に嫁ぎ、現在は県城に住む。四清運動では靈石の裴隊長の工作隊が来た。政委は省の医学院の幹部の王某が担当した。WXH はある富農出身の村民の履歴を中農に改ざんしていたので解任された。ZWZ は会計だったが横領着服で解任された。副主任の WLY は解放前に一貫道であったことを他の一貫道員から告発された。

・幹部の交代＝工作隊が幹部の能力を評価するが、村民から意見を聴取して決まる。

・現在の書記＝村官の JZQ、私の兄弟の孫（侄孫）に当たる。大学名は知らないが、卒業後着任して 2 年。L 書記は党内で処分され、現在は村の主任を務めるだけだ。

WD

訪問日時：8 月 15 日午前 訪問者：祁・内山 訪問場所：WD 宅

※72 歳、午年。党员。前日の J さんの話から、突然の訪問。朝食を済ませた直後。山西大学側メンバーも含めて、今までインタビューを受けたことがない。

家族

・父は WZR、母は JJR（西游駕出身）。

・妻は TWH（本村人）61 歳。

・長女は WSF、33 歳。中等専門学校卒業後、洪善鎮の役所に就職し、計画生育弁公室に勤務し、通信教育の大学を卒業後、県の党組織部の幹部となった。県城に住んでいる。長男は、WWF、30 歳。長治学院大学を卒業後、県城に住み、平遥中学（高校）の音楽の教師。

民弁教師

・9 歳で小学校に入学後、平遥の中学を卒業。村に戻り農業に従事。1971 年に村の小学校の民弁教師に応募し、12 年間勤務。請負制となって、1983 年に辞任し、南政村の郷鎮企業で会計となり 96・7 年まで勤務。その後は農業。村の教師となったのは、前任者が公弁教師となって転任したので、村の幹部に申し出た。教師の仕事は大変だった。朝の 6 時 20 分には出勤し、夜の 10 時まで勤務した。労働点数は、1 日 10 点で、最も高かい方だった。

・当時の小学校は、廟の庭の中にあり、教師は 10 数名。男女半々だった。当時の村の事務

室は、三道街の西側の元地主の家を使っていた。校長は公弁教師だったが、他の者は皆民弁教師だった。自分が年長だった。生徒数は 300 人から 400 人。私のように請負後、転職したのは 4, 5 人。

農業

・初めに小麦は自家消費分を生産し、その後トウモロコシを作って販売した。一時期アスパラを生産したが、5、6 年で土質が悪化し減産した。トウモロコシより高く売れた。トラクターは持っていない。もっぱら妻と人力で耕作する。請負制後、生産隊のトラクターは個人に売却された。トラクターを雇って工作を依頼する農家も多い。

紅衛兵

・文革時に村幹部の WXR の呼びかけで、貧下中農が集まって二つの組織を作った。
・一つは開新宇、人数が多い。もう一つは掃残雲、人数は少ない。
・開新宇には FSW（故人）がいたが、他の人は忘れた。
・省の紅衛兵組織が紅総と紅聯の二つに分かれたので村でも、紅総の下に開新宇が、紅聯の下に掃残雲に分かれた。この村では集会もなく、形だけの紅衛兵組織だった。（警戒しながらの応答！）文革時期の生活はそれまでと変わりはない。『芙蓉鎮』も見たことはない。

郷鎮企業への転職

・民弁教師では、請負制となつてからの農業をする時間が無くなっていた。転職先は、N 村の石膏の粉を生産する工場だった。工員が 4、50 人の小規模な企業だ。1996、7 年に倒産した。
・現在では、国家から年金として、60 歳以上は一月に 55 元を支給される。トウモロコシを売って、年間に 1 万円の収入がある。国家の政策のおかげだ。まして子供二人が県城に住み、出世したことは自慢だ。

毛沢東について

・文革時の生活は苦しかった。毛沢東は平等を呼びかけたが、村民たちは私心を克服できず、毛の目指すレベルに達することができなかった。毛沢東を尊敬している。彼と共産党がなければ、新中国は存在しない。
・毛沢東は大同の世界を作ろうとしたのだ。貧しい時も豊かな時も皆一緒だ。資本主義の路線を歩むことは認められなかった。
・鄧小平は、一部の人が先に豊かになることを認めたのだ。集団化は当初必要だった。生産力も向上した。ただ大躍進や製鉄運動で混乱が起きた。私も資本主義打倒という毛沢東の呼びかけに応じて、紅衛兵に参加したのだ。

(Jさんが来宅する。)

政治隊長

・第4生産隊の政治隊長を務めた。生産隊は、隊長・副隊長・政治隊長・婦人隊長の4人が毎日隊員を引率して従事した。

・政治隊長の任務は、集会を開催し、新聞を皆の前で読み上げ、さらに社員間のトラブルを解決する「思想工作」だ。トラブルの多くは、仕事の分担、労働点数の評価をめぐるものだった。

(終了後、祁さんが賭博の取締りについて聞くと、昔の厳しかった状況を説明)。

HLY

訪問日時：8月16日午前・午後 訪問者：祁・菅野(午後のみ)・内山 訪問場所：HLY宅

幹部歴

・60年来の党员。1952年に村長。54年に入党。58年に高級合作社時代の第一期の書記。61年に平遥の綿花加工工場に転職。63年定員削減により帰村し、3年間村の副業主任。その後治保主任を16年間歴任。

・幹部としては、集団化を進めるときに、村民が自分の土地を守ろうとするので、説得するのに苦労した。

・互助組には皆あまり参加しなかった。初級合作社には村民の3割が参加した。

・高級合作社は上から強制されて参加した。7戸で形成された最初の互助組に参加した。参加者はDCX、MRR、L某、あとは忘れた。当時、自分は民兵隊長だったので、上からの集団化の指示を受けて参加した。

・互助組は労働だけの協力だったが、初級合作社では土地の共同使用をするので、農民は賛成しなかった。1畝を1股に統合した。解放前の時代の協力関係は、「打包」と呼ばれた。本当は「打邦」だが、方言でそのように呼ばれた。集団化には上部から工作隊が来て村民大会を開き、説得したが、農民は納得しなかった。そこで幹部が一軒一軒まわって賛成するように態度表明(表態)させた。

・集団化は、県で三級幹部会議を開き、「拡社」といって、老社が新社を作る方針が決められたが、毛沢東が急に高級合作社を作る方針を打ち出した。本村の「平和」「勝利」「建設」の三つの初級合作社は、一つの高級合作社になった。私は「建設」に所属していた。

農業の共同と雇農

・換工などの名称はない。農業労働力が不足すると、豊かな家は長工を雇用し、中レベルの農家は短工を雇った。貧しい農家同士はどんなことでも互いに協力した。

・長工は年単位で雇われ、短工は1ヶ月単位化、2、3日単位で雇われた。短工市や中人はない。長工は知り合いの紹介がほとんど。短工は近隣の人や仲の良い人同士で行われた。

・私は1942・43年の2年間、16・17歳の時に、長工をした。ここから遠い欽賢村の雇い主は、100畝の土地を持っていたが、60歳の老人で労働せず、30歳か40歳の息子は北京で染料店を経営しており、2年間で一回しか顔を見たことがなかった。私の父は貧しかったが、顔が広がったので、この仕事を紹介してくれた。雇い主は父の友人を通して働く人間を探していた。給料は年間3石（500斤ぐらい）の高梁だ。旧暦の3月から12月まで、家畜の世話など休みなしで働いた。

・長工は自分一人だった。他は短工だった。夏には4、5日、秋の小麦の収穫時期には半月ほど、4、5人を雇っていた。住まいは雇い主の庭の中にある小屋の部屋に一人で寝泊まりした。食事は雇い主と一緒にだった。朝5時か6時ごろから仕事をして、暗くまるまで働いた。ただ一人で働くので、自分の都合で休憩が取れた。貧しい農民のほとんどは長工等をした。

大躍進

・毛沢東の行った悪いこと。三つの赤旗のもとに運動が行われたが、嘘の報告をした。本当の報告をすると批判された。水利建設はあまりしなかったが、製鉄は盛んだった。ここから4、50里離れた四十畝山に鉍石を採掘するように、村の労働力全てが動員された。困難期には赤い粉（高梁の粉）が一日一人当たり1斤しか支給されなかった。餓死者は1960年で104人。1963年に大食堂は閉鎖され、「小片荒」の土地の開拓が認められた。

右派

・毛沢東時代は、地主・富農・反革命・坏分子・知識人が黒五類だったが、文革の時に投機分子と横領分子が加わり、7黒類となった。子供などの家族に悪い影響が出た。

四清運動と文革

・文革は悪いが、四清運動は正しい。組織・政治・経済・作風が改められた。毛沢東時代は厳しかったが、この村では大きな運動はなかった。各村の幹部が人民公社の本部に集められ、一か月学習班で自白をさせられた。67年に緑化肥坊のZWZが汚職分子、HLHが投機倒把分子として批判され、坏分子の帽子をかぶせられた。Zは数百元を、Hは肥料の売却分を横領した。

紅衛兵

・二つの派閥があった。大隊党支部を支持したのが保皇派の「総司」である。一方、造反派が「連絡站」で、WXN、WYG、WDがいた。县城の紅衛兵の派閥と繋がっていた。

・WXNは当時60歳ぐらいで、土地改革の時に貧農協会のリーダーだったが、幹部になれな

かった者だ。

- ・ WLG は 30 歳未満、卒業後帰村して、村の指導権を奪おうとした。
- ・ WD は一般農民。皆黨員ではなかった。
- ・ 江青が「文攻武衛」を打ち出したので、紅衛兵同士の武闘が始まった。
- ・ この村の紅衛兵の一部は、県城の武闘に参加した。この地区の「連絡站」の本部は王家庄だった。本村の造反派はそれに属した。1976 年に「7・23 布告」が發布され、武闘を停止し大連合するように呼びかけられた。王西寧たちは一般農民になった。

治保主任

- ・ (本人は、文革時は工場にいたと言って、帰村時や副業主任などの就任から計算すると、年次の確認ができなかったが) 78 年以降、治保主任になった。保衛が主な任務。
- ・ 治保委員は 5、6 人いた。自分が信頼する者を任命した。メンバーの名前は公安に届け出た。それらの人は「敢悪人」の人だ。
- ・ 夏や秋には、10 数人で「巡田」といって畑の見回りをした。
- ・ 冬は「巡夜」といって毎晩 6、7 人で見回りをした。
- ・ 治保主任と保衛たちには村から年間 3,000 元の手当てが出た。泥棒、賭博、その他の悪事を見張った。
- ・ 「巡夜」は毎晩 9 時に集合し、5、6 人が 2 班に分かれ、12 時まで見回りをした。帰宅は午前 2、3 時だった。2 組かそれぞれ銃を持って、最終的に合流すると、銃を発砲した。古い銃だったが、私が管理した。賭博を見つけると、金を没収した。所持金がない時は、後日罰金を出させた。

八路軍

- ・ 長工を辞めたのは八路軍に入隊したからだ。19 歳の時にゲリラ戦に参加した。1 日 2 食の食事で緊張の連続だった。120 師団独立第 4 旅団に所属し、賀龍が指導者だった。国共内戦期、入隊してから 3 年未満で村に戻った。帰村してからは民兵隊長になった。

水利

- ・ 大躍進期に最大に成果は、沙河の幅を広げ、川底を掘り、排水を行い、アルカリ土を防いだことだ。最近ではアルカリ化が進んでいる。
- ・ 沙河の水利建設は、河の工事を分担して生産隊ごとに工事をさせられた。この村からは一つの生産隊から 20 人ずつ、200 人が動員された。動員の大半は働き盛りの若者だ。仕事は大変だったが、特別の手当てはなく、一部の生産隊に食事を提供するだけだった。
- ・ 大躍進の時、この村には 3 つの大食堂があった。

GCY

日時：8月18日午前 質問者：祁・郭永平・内山 訪問場所：GCY 宅

※82歳、申年生まれ。以前三谷氏が訪問したことがあるという。

村幹部について

- ・この数年の国家の政策は良い。村の幹部は国から支給された道路整備費を飲み食いに使ってしまった。せつかく整備した村の道路も工事して間もないのに壊れてきた。コンクリートのセメントと砂の比率が悪いからだ。セメントが少なく、砂が多い。幹部が手抜き工事をしたからだ。
- ・昨年幹部の選挙があったが、メンバーに変更はなかった。投票所は小学校だったが、投票に来た村民は少ない。こんな状況に一部の村民は失望している。だから投票に行かなくなった。
- ・この村では、「賄選」はないが、投票する人は幹部と利害関係がある人が多い。だから投票率は低い。
- ・幹部たちは選挙前に密かに戸別訪問している。だから十数年間幹部が変わらない。これからも続くかもしれない。
- ・「村官」は聞いたことがない。村の幹部は、上級機関の幹部とつながっている。人民公社時代には、工作隊が来たが、今の上級幹部は村に来ることはない。電話で連絡してくるだけだ。

四清運動時の工作隊

- ・7、8人が山西省から派遣されてきた。村の幹部を整頓した。冬の間この村に滞在し、村の空き部屋に住んだ。私の家にも「派飯」しに来て、一緒に食事をした。食べ終わったら「糧票」を置いていった。工作隊は一軒一軒「派飯」した時、村民の意見を聞いたことがあるが、私には特にない。

旧幹部について

- ・工作隊がJさんを批判したメモを提出させたことはない。Jさんは大食いで、嘘つきだ。自が読めないで、よくいい加減なことを話した。人を殴ったことはない。殴るのは「保衛」の人だ。Jさんは村の幹部中では3番目か4番目の人だった。
- ・Hさんは治保主任になったが、いつの頃だったか覚えていない。治保主任を辞めて生産隊長になった。JさんもHさんも同じような類の人だ。
- ・良い幹部はWXRだ。彼は人を殴ったことはない。定年してからは村のことに関与していない。
- ・WHは四清運動の時に一時批判されたが、再び幹部となった。トップにはならなかった。

よく暴れ激怒しやすかった。四清運動の時に批判されたのは、村民を口頭で厳しく叱ったからだ。殴ったからではない。選挙で落選して治保主任を失脚した。その後は人民公社の水利担当者となった。退職金をもらって村に戻ってからは年金生活だった。(村の旧幹部については、WXR 以外についてはおぼえていないとして、語りがたらない。)

LH 会社について

・沙河が汚染されたのは知っている。LH 会社の人は省までの人脈を持っている。省から借金もできる。村人はあきらめている。数十畝の土地を買って工場を建てた。村の土地を貸与しているのではなく購入したのだ。請負制でその農地の使用权を持っている村民が、高値で売ったのだ。書記まで含めて村の幹部も知っている。村の幹部が上級機関の報告していないので、上級機関の幹部は知らない。

村への救済について

・(山西省では 3 年前から村に 1 トンの石炭か、300 元の支給をしているが) この村では貧困救済金支給対象となる何世帯かがいるが、まだ支給されていない。(幹部が隠匿した可能性もある。)(貧困救済対象者には)今年から 80 歳以上の農民に年間 100 元を支給されるが、WJZ の信用社に申し込むことができる。まだ支給してもらっていない。

・(村での集会は) 以前は小学校の広場で開催された。今では村民も村のことには関心が薄く、幹部も村民のことを考えてはいない。村の幹部は村民のためには何もしない。幹部の仕事はほとんどない。農業税もなくなり、国からの税金は国がやり、灌漑も村から委託された管理人が担当している。汾河の水の利用も管理人に水代を払えば済むことだ。管理人は毎年変わるので、今年の担当が誰かわからない。

廟の再建

・この村にはいくつかの廟があったが、閻錫山の時の戦争で壊された。N 村では観光のために個人や集団が廟を再建している。

長工

・解放前に長工をしていた。P 県の馬車で陽泉などに出かける運送業に従事した。農業でなくても「長工」だ。月 28 元の給料だ。毎月ごとに口頭契約で続けた。十数年から二十年間続けた。解放後、集団化の時代にも馬車引きを続けた。

LRX

日時：8 月 19 日午後 質問者：祁・内山 訪問場所：LRX 宅

※予約してのインタビュー。1949年、丑年生まれ。65歳。録音せず。

家族

- ・父はLJC、母はRXY、XL村出身、100歳、村の最年長者。県の中でも100歳以上は40人いる。
- ・長兄は、LRZ、本村在住、74歳、1964年から80年まで、村の治保主任を担当、HLYはその後任、計画生育違反で免職。次男が本人。弟（三男）はLRG、57歳、平遥県の土地局の副処長。
- ・妻はLYM、DQ鎮出身、64歳。長男はLSQ、34歳、未年、この村の電工。次男はLSS、32歳、環境衛生局勤務。長女はLXJ、28歳、天津大学卒業後、太原市青年団委員会勤務。

本人の履歴

・6年間道備村小学校通学、卒業後2年間、村で農作業に従事。その後5年間人民解放軍に入隊し、北京軍区第一戦車師団で装甲車に大砲を運ぶ任務に従事。1973年3月に除隊した。前年に林彪事件が起きた。叔父がP県宣伝部長だったので、治西炭鉱の仕事を紹介されたが断り、既存して10月に第6生産隊長となる。7年と100日採算隊長を務める。その後鉄道のメンテナンスを請け負う民間の太原市養路工程隊に8年間勤務した。帰村して2年間休養して、村の幹部となる。WXR書記、TWY村長の時に、副村長。1年後の1994年に村長となる。

紅衛兵

- ・文革が始まるとこの村には二つの紅衛兵の派閥ができた。造反派の「掃残雲中隊」と、実権派の「総司」だ。私は当時16歳だったが、造反派のリーダーの一人だった。隊長はLZZで、文革後WJ庄に引っ越した。党员だった。
- ・紅衛兵たちは毎日大字報を書いて、村の壁に貼った。県城にも貼りに行った。造反派は、県での武闘で、一時期実権を握ったが、「総司」に奪い返された。陳永貴が造反派の派閥を支持する平遥での集会に来た。
- ・「総司」にはWXR、WZX、WYXがいた。私たちは女性書記のWYLと組んで、WXRを糾弾した。村の中が混乱した。WXRたちは中央から高級幹部を呼んできた。WJ庄の招待所にももっていたので、座り込んで請願をした。
- ・WYLは当時40歳代だった。他村から嫁いできたが、今では60歳ぐらい、今でもこの村にいる。夫はLJYだ。彼女ははじめ副書記で、書記はWHだ。村長はLTWで、二人とも辞任した。
- ・当時村では、電気工事での汚職が起きた。偽の領収書で公金を横領し、牛肉などを購入していた。WXRは女性書記を守って、「留党察看」とした。

上級機関からの批判と旧幹部

- ・村民の私への支持がなくなり、やる気がしなくなった。上級機関から批判を受けた。村から有料で土地を貸し出し、利益を得た。このことは村民から指示を受けた。
- ・上級機関への密告者は、WXR と女性の王だ。WXR は私に「低保」を申請してきたが、認めなかったの恨んでいる。その問題は副書記が処理したのだ。WXR たちは、山西大学のメンバーや案内人も、私に一派だと思っている。
- ・後継者のテイ副書記は問題がある。もう一人副村長は、嘘つきで横領するし、信用できない。
- ・HLY も私を恨んでいる。治保主任を辞めたことだ。
- ・JSL は「棉花事件」の時、WXR の処理でショックを受け、それ以後精神的に不安定となり、頭がおかしくなった。

二、靈石県溝峪灘村

LFH

日時：8月17日午前 質問者：祁・菅野・内山

※当日出席した3人の老人の一人。94歳、申年。甥（兄LCQの子）の李万珍（67歳）が同席。

家族

- ・父はLCD、母はWLS。
- ・妻はYYL、87歳。
- ・長女はLJZ、65歳、40里離れた王家溝に嫁ぐ。長男はLWW、62歳、本村で農民。次女はLSC、57歳、靈石在住。三女はLYZ、56歳、張家庄に在住。四女はLXZ、48歳、靈石水峪郷に在住。

学歴

- ・小学校に2、3年通学。
- ・教科書として「共和国」「通説国」を読んだ。
- ・卒業後、農業に従事。

日本軍

- ・何年かこの村に石膏調査隊が住んでいた。我が家は日本軍に、川沿いの4畝の土地をとられた。

・日本軍は中国軍の戦闘中、私に山の上まで道案内をさせた。水源が見つかり、毒見のために私に水を飲めと迫った。腹が痛いので拒否すると、銃剣で脅された。警務隊（東北から来た中国人）の隊長が、私が八路軍ではないといってくれたので助かった。

短工

- ・父は 9 畝の土地を持つ中農だった。私は村の中で短工として働いた。雇い主は不安定だった。本村には他村に働きに行く者もいた。紹介人はいなかった。
- ・短工として雇われたときは 2, 3 日働く。手当として食糧をもらった。夏は小麦、秋はトウモロコシを、1 斗（14 斤）をもらった。
- ・村内で働くときは、自分の農具を持参した。
- ・他村で働くときは、雇い主の農具を使う。靈石では雇い主が食事を提供した。霍州では食事は出されなかった。
- ・夏は朝 6、7 時から晩の 5 時まで働いた。
- ・秋は朝 6 時から働き、夕食は夜の 8 時ごろになった。
- ・契約はすべて口約束。この村では前日に決まった。
- ・霍州では 1 日契約で、夕食が終わると、短工は村の廟で寝泊まりした。翌日雇い主が廟に来て必要な人を雇った。この村では 2、3 日が通常だ。

長工

- ・この村から長工になったのは 2, 3 人いる。
- ・兄の李長慶は、ここから 20 里離れた棗園村のお婆の家で働いた。

土地改革と集団化

- ・村の土地を人口で割った平均数として計算された。工作隊が来て呼びかけたので、互助組が村の中に 5, 6 組できた。
- ・私が加入した互助組は 5 戸だった。私が組長だった。しかし名前だけで、実態は各戸別に作業していた。
- ・当時の村の書記は LP で 40 歳台だった。
- ・初級社の一つだけ。高級社では隣の後河地村と一緒にになった。
- ・大躍進期にはこの村の働き手が他村に連れて行かれ、土法炉を作った。水利工事では旱井を掘り、ダムを作った。
- ・大食堂があったが、2, 3 日に 1 回の割で食糧が支給されただけだった。木の葉や雑草まで食べた。餓死者はいなかった。

（菅野智博氏によるまとめ）

日本軍関係

- ・日本軍の石膏調査隊が同村にきていた。日本軍が来てから4畝の土地取り上げられた。
- ・Lさんは日本人の案内人をやったことあった。水源を見つけた時に、Lさんにその水を飲ませようとした。水を飲まなかった李さんについて銃を突きつけた。警務隊によって救われた。

短工

- ・農繁期に短工として村内で働いていた。他の村で働く人もいたが、Lさんはほとんど村内で雇用されていた。
- ・本村で雇用された場合、農具を持参していたが、他の村で雇用された時は雇用主の農具を使用していた。
- ・短工の食事は地域ごとで異なっていた。霊石県は3食支給される場合が多かったが、霍州の場合は支給されなかったことも多かった。
- ・朝食後に6、7時から労働を開始する。夏は5時まで、冬は6、7時まで働いていた。
- ・ほとんどの場合は前日に口頭約束で契約され、労賃は1日当たり1斗(約14斤)の穀物(夏は麦、秋はトウモロコシ)が支払われていた。
- ・人市のような労働市場について聞いたことないが、遠くに行く人は臨汾まで働きに行っていた。臨汾から収穫が始まるので、収穫期に合わせて北上していた。
- ・霍州では家が遠い短工は、仕事後に県城の廟に戻り、そこで寝ていた。そして、翌朝、雇用主が再び廟にきて短工を雇用していた。
- ・溝峪灘村はそれほど裕福ではないため、長工を雇用している農家がほとんどなく、数名の短工を雇用するのみであった。村内から3、4人が長工として別の村に行っていた。李さんの兄の李常慶(死去)は長工として20里離れていた村の姑夫の家で労働していた。

土地改革

- ・28、9歳の時に土地改革が行われ、同村では1人当たりの土地を計算し、超過分の土地を貧農らに分けた。李さんの家は中農で、土地は変わらなかった。

互助組

- ・村で5、6個の互助組できたが、李さんがいた互助組は関係よい農家5戸(L氏一族を中心に)で組織していた。李さんは組長を務めていた。当時の党書記はLP(40歳ぐらい)で、かつての八路軍の指導員であった。
- ・初級合作社は村内で1つのみ、高級合作社は別の村(後河地村)と一緒にあった。
- ・当時の互助組は名前のみで、実際のところそれぞれの農家で農業を行っていた。ただ、農繁期の労働協力は労賃を必要なくなった。
- ・大躍進時、村の労働力は外に鉄打ちに村外にいった。
- ・村で井戸とダム(修築)もあった。

・大食堂は一つあったが、大飢饉の時は2、3日で1回の食事のみであった。1960年の時餓死者はでなかったが、たまに葉っぱを食べていた。

三、四社五村（義旺村機井ステーション）

王宝虎

訪問日時：2013年8月18日午前

訪問者：調査団全員、霍州市水利局副局長張愛国氏同行

通訳：祁建民

場所：義旺村機井（モーターのついているポンプ井戸）ステーション

王氏とは2007年12月17日午後、内山、弁納と祁が義旺村を訪問した時に、会ったことがある。2011年8月22日午前、調査団全員で2回目の訪問をした。今回は3回目である。王氏は元義旺村村長で、現在義旺村供水ステーションの請負者で、44歳である。今回も親切に対応してくれた。

王：2年前に、機井を掘った。しかし、今年は雨量が多く、泉水だけで十分で、4月以降機井の水を使わなくても良かった。高速道路のサービス・エリアではすでに二つの機井を掘ったので、われわれの水を利用しなくなった。現在、三つの村から水費を徴収している。年間では劉家庄5000～7000元、琵琶溝3000元、白木溝3000元である。現在の義旺村の村長は朱兵兵で、38歳、殆ど村にいる。義旺村の村長への立候補の条件は、全村の水費を負担することである。だから、いま村民は水費を払わない。朱兵兵は外で工程隊（建築会社）を持っているので、毎年村の5000～7000元の水費を負担できる。

洪洞県の方は四社五村の水を利用しないが、この水権を持っているので、毎年祭祀に参加した。水道のメンテナンスの費用は全て霍州側が負担する。2年前、この機井を掘ったので、四社五村の水量が少なくても心配しなくてもよくなった。しかし、毎年徴収した水費では水道のメンテナンスの費用に足りない。

機井の深さは510メートルで、水量は1時間に40立方で、その水は全て供水ステーションに送る。機井ステーションと付属建物の総面積は200平方メートル、沙窩村にあり、竜王廟から数十メートルの距離である。この機井を掘る費用は100万元で、すべて霍州市水利局が出資する。パイプで水を供水ステーションに送るが、途中20数個の水門がある。水門を開ければ、林檎畑も灌漑できる。水費は1時間30～40元で、これは電気代と工賃を除く分である。

四社五村の竜王廟祭祀は毎年行い、祭祀の輪番も変わらない。昨年の大祭は仇池社が担

当し、水道のメンテナンスの費用 4000～5000 元はすべて私(王宝虎)から支払った。毎年、殆ど私が支払っている。今年の大祭は蘭李庄が担当する。大祭時の水道のメンテナンスの費用は私が負担したが、大祭の行事ための費用は担当村が負担する。この費用は普通 4000～5000 元であるが、時には 10000～20000 元にも昇った。主に食事代、演劇代の費用である。毎年、四社五村の新しい幹部たちが集って、会食する。

四社五村の無形文化財の申請はまだ申請中である。

私(王宝虎)は 11 年間ずっと義旺村の社首で、現在の副社首は劉小虎(副村長)である。他の村の社首と副社首は殆ど書記長と村長で、毎年の会合は社首と副社首のみが参加する。即ち皆村の幹部である。演劇は霍州の劇団を招く。今年蘭李庄は演劇の費用 20000 元くらいを支払った。演劇の内容はすべて古代劇なので、私も観なかった。来年義旺村が大祭を行い、私は水道のメンテナンスの費用のみ出す。毎年の水道のメンテナンスの費用は私が負担するが、その後水利局に申請するので、実際はこの費用は水利局が出す。

現在、霍州側と洪洞側の間には収穫の時に無料で助け合うこともあった。いま機械を使って村の幹部が組織する。その他、村の間に何か交通事故が起こったら、解決しにくい時には、村の幹部が介入すれば解決できる。霍州側と洪洞側との水以外の交流は、洪洞側は石材があるので、それをわれわれが購入する。四社五村の間の交流は他の村より多い。

なぜ私が社首に選ばれたのか、その理由は私が洪洞側と仲良く、交渉が順調であるからだ。誰でも洪洞側と仲良ければ、社首に選ばれる。これは前任者が決めることではない。私の家族はこの村では大家族である。誰でも村長を立候補する時、まず私を訪ねる。二、三人が出て競争する場合は、私は他の人を立候補させない。今の書記長はまだ李さんである。

近年、四社五村の人の中では外へ出稼ぎする者が増えた。現在、農業生産は機械化されたので、若者は殆ど外に行く。沙窩村は本来 400～500 人がいたが、現在 100 人くらいしか村にいない。沙窩村の子ともが義旺村の小学校に入学し、夜もそこに泊まった。

義旺村は昔小麦を栽培したが、4、5 年前からトウモロコシを栽培し始めた。トウモロコシのほうは収益がいい。カトリック信者は近年増えた。プロテスタントの信者もいる。

私(王宝虎)は再婚し、子供は既に大きくなった。いま、夫婦だけで機井ステーションの建物に住み、11～12 ムの土地で、トウモロコシを栽培している。